

性差医療の 発展と悩める女性 たちのために



片井みゆき 東京女子医科大学准教授

かたい・みゆき——東京都生まれ。平成元年信州大学医学部卒業。

5年信州大学大学院医学研究科修了。信州大学医学部附属病院を経て、10年より米国ハーバード大学医学部フェロー。

13年信州大学医学部附属病院。19年東京女子医科大学東医療センター性差医療部准教授。その他、全国医学部長病院長会議男女共同参画推進委員会委員なども務める。著書に『女性医師としての生き方』（じほう）など。

✕ やり直しがきかない
真剣勝負に日々臨んで

——片井さんが、こちらの東京女子医科大学で手掛けておられる「性差医療」とは、どのような医療なのでしょうか。

片井 性差医療というのは、男女差を考えた医療で、日本では平成十一年の日本心臓病学会を機に広く認知された新しい学問です。

私は以前、母校の信州大学医学部附属病院で、性差を取り入れた内分分泌療法に携わっていましたが、十年前に東京女子医大に日本で初めて「性差医療部」が立ち上がった際に、推進役として迎えられることができました。以来、性差医学の臨床と研究と学生教育に取り組み、「女性専門外来」で女性における性差医療を実施しています。この性差医学・医療の研究が進むことで、これまで不調の原因が分からなかった患者さんに、適切な治療を施せるようになってきています。

——少し事例をご紹介ください。

片井 まず男性か女性か、どの年代かでなりやすい病気に違いがあります。特に女性は閉経後に内分環境が大きく変化し、起こりや

すくなる病気が変わります。病状の訴え方にも性差があって、女性は男性に比べ、気になることを遠回しに訴える傾向があるのです。

ですから病状を聞かれ、例えば「昨日、隣の奥さんが……」みたいな話から始まると、忙しい外来では医師から話を即座に遮られ、意を伝えられない女性が多いのです。

でも、わざわざ病院に来てそんな話をするのは、何か意味があるわけですね。女性専門外来でよくよく聞いてみると、実は昨日隣の奥さんがくも膜下出血を起こして救急車で搬送された。そういうえば自分の母親もくも膜下出血だった。遺伝性もあると聞き、自分もこの頃頭痛が酷くて気になるので調べてほしい、ということが分かったりするので。

患者さんは何が心配で、どんな検査を希望しているかを含め、気持ちもしっかり受け止めないと、たとえ診断は正しくても本人は納得できず、病院巡りを繰り返して国の医療費も嵩むばかりです。

また、女性の場合、様々な症状を複数訴える傾向があり、背景に隠れた病気があっても見つかりにくい傾向もあります。ですから私